

平成 26 年度

事業所名：グループホーム すまいる

1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	0390200111		
法人名	医療法人 仁泉会		
事業所名	グループホーム すまいる		
所在地	〒027-0096 岩手県宮古市崎嶮ヶ崎第9地割39番地34		
自己評価作成日	平成26年7月31日	評価結果市町村受理日	平成26年10月21日

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	http://www.kaijokensaku_ip/03/index.php?action=kouhyou_detail_2013_022_kani=true&JigyosyoCd=0390200111-00&PrefCd=03&VersionCd=022
----------	---

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	特定非営利活動法人 いわたの保健福祉支援研究会
所在地	〒020-0021 岩手県盛岡市中央通三丁目7番30号
訪問調査日	平成26年8月8日

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

その人らしく生きるとは、どういうことなのかを念頭に職員一人ひとりが統一したケアを心掛けている。地域活動に参加したり、ホーム行事にも参加してもらうなど少しずつではあるが、交流の場が増えている。

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

宮古市から久慈市に向かう国道45線沿いの崎嶮ヶ崎地区に所在し、周辺には同法人の運営する介護老人保健施設「ほほえみの里」とグループホーム「すまいる2号館」がある。利用者の年齢は最低84歳から最高96歳と高齢化が一層進み、外出時は殆どが車いすを利用する状態にある。職員は「共に生き、共に笑い、助け合い…」の理念のもと実践に取り組んでいる。三々五々ソファで触れ合う利用者の表情は明るく、調理や洗濯たみなどの役割を担いゆったりと過ごしている。家族からは、家庭的な感じがよく、本人の能力を活かして支援してくれるとの声が聞かれる。地域とは自治会活動を通じて交流を深めているが、さらにホームと子供たちとの交流の場を広げたいと運営推進委員の協力を得ながら検討している。重度化には医師の指示書があること、介助でも食事ができること、入浴はシャワーのみとして説明し対応しているが、終末期の対応も希望が多く、医療との連携強化、職員の資質の向上に努めており、今後の取り組みが期待される。

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1～55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項 目		取 り 組 み の 成 果 ↓該当するものに○印		項 目		取 り 組 み の 成 果 ↓該当する項目に○印	
56	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○	1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらい 3. 利用者の1/3くらい 4. ほとんど掴んでいない	63	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)	○	1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
57	利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	○	1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	○	1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
58	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが広がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	○	1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くない
59	利用者は、職員が支援することで生き生きした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66	職員は、活き活きと働けている (参考項目:11,12)	○	1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60	利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
62	利用者は、その時々状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らせている (参考項目:28)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない				

【評価機関:特定非営利活動法人 いわたの保健福祉支援研究会】

平成 26 年度

2 自己評価および外部評価結果

事業所名 : グループホーム すまいる

自己 外部	項目	自己評価	外部評価		
		実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容	
Ⅰ.理念に基づく運営					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	ホーム理念がなぜ必要かを職員全員で再確認し日々のケアの意識を見直した	理念の見直しを検討しその内容を確認した結果、継続することとし、改めて現行理念の意図を全職員で再認識し考えの共有を図っている。また、理念と実践目標8項目を日頃において意識化するため玄関、事務室、ホールに掲示し実践で活かすようにしている。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	ホーム開催の花火会を毎年行なう事で、少しずつ地域の方々に認識頂いている。公民館行事にも積極的に参加している	自治会に加入し総会にも出席している。春・秋に実施される清掃活動、輪投げ大会などの行事にも職員・利用者で参加し地域との交流を図っている。また、住民に呼びかけホーム主催で「AED」の講習会の実施しているほか、学生の実習・体験学習を受け入れホームの理解に努めている。	自治会活動に参加しているほか、ホーム行事への参加も呼びかけるなど、積極的に取り組んでいるが、今後は、推進委員の協力を得ながら、子供たちとの交流の機会と幅を広げたいと検討しており、今後の取り組みに期待したい。
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	学生の実習を受け入れ、認知症の方の対応、理解の場としている		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	メンバーの拡充はできていないが、メンバーの入れ代わりがあり、新たな視野、アドバイスが頂けている	2ヶ月に1回開催し、写真を挿入した分かりやすい資料による活動状況や、入退去や健康状況などを報告しているほか、委員から「グループホームの理解を得るための見学会の開催」の提案が出されている。今年度、委員交代が行われ、委員から運営に積極的に協力したいとの心強い意見も出されており、現在、地域との交流を深めるための取り組みを検討中である。	地域との関わりを深めるためには運営推進会議の場の活用は大きな効果があると考えられる。そのためには、会議に地元のいろいろな分野の方をお招きしお話を聞くことが交流のきっかけとなると考えられるので一考されたい。
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くように取り組んでいる	判断に迷うことなど、随時相談したり、アドバイス頂いている。運営推進会議の案内文を手渡し、顔を知って頂く機会としている	運営推進会議に出席し様々の情報や意見をもらっている他、日常では実務レベルでの連携は円滑に行われている。行政も協力的で、地域交流を図る事業の取り組みに公園使用手続きなど、何でも相談できる協力関係を築いている。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者および全ての職員が「介指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	身体拘束は身体の拘束だけでなく、言葉の拘束もあることを理解し、職員間で話し合いを行なっている	新人の職員には、「ダメ」「待って」等といった否定的な言葉遣いに特に注意しているほか、業務会議を通じていわゆる身体拘束をしないケアの取り組みについて理解を深め、職員同士で確認し合っている。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	虐待につながるような言動がないよう職員間で話し合っている		

[評価機関 : 特定非営利活動法人 いわたの保健福祉支援研究会]

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	制度を利用している方もおり、関係者と話し合う機会があり、職員間で共有している		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	入居時に説明を行い、納得頂いた上で契約締結している。疑問、不安な点に関して、その場で確認をとり、新たな不安等にはその都度対応すること伝えている		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	入居者とは日常生活のコミュニケーションを通して要望を伺うようにしている。家族とは面会時、近況報告しながら要望を伺っている	面会時や通院時、家族へのお便りを活用して意見・要望を聞くほか、日頃の会話や、入浴時の話しやすい雰囲気の中で、「家族から髭を剃ってほしい」など、聞いた内容を職員で話し合い共有して運営に反映させている。	
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	日々の業務に関しては業務会議や毎日の申し送りの中で意見、提案をする機会としている	申し送りや毎月開催する業務会議を通じて職員のアイデアや改善点などを話す機会をつくり、職員間で検討している。最近では、オムツ交換後の汚物処理の仕方や、食事時の座席を工夫し全員が顔を見合わせて食事ができるようにするなど、運営に活かしている。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	個人目標を設定し、年4回の面談にて進捗状況を確認すると共に、ホーム長と職員の意見交換の場となっている		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実践と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	新人育成の内部、外部研修に積極的に取り組んでいる		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	法人内での合同勉強会、行事、沿岸北ブロックでの交換研修を予定している		

自己	外部	項 目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
Ⅱ.安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	申請を頂いた際、訪問調査に伺い、ご本人の不安なこと、要望を聞き取り、入居後のケアに取り入れている		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	ご本人との面談時や申請時、悩みや要望を確認し、ホームで対応出来る事をお伝えし、関係作りに努めている		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	生活暦等、家族から知り得た情報やご本人の様子を確認しながら支援内容を検討し、対応している		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	軽作業、(洗濯たたみ、洗濯干し、食器拭き、名前書き等)を個々の力量に応じて、その都度声掛け見守りを行いながら協力して行なっている		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	随時、状況に応じて報告し、面会、電話協力をお願いし、共に支えていく関係作りに努めている		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	面会時には穏やかな雰囲気作りを心掛け、次の面会に繋がる様努めている	家族の協力を得て墓参りでの自宅帰省や、昔から利用している美容院の利用、更には自宅近所の方の来訪などの協力を得ている。また、系列法人運営のすまいる2号館や老人保健施設ほほえみの里との交流や行事を通じて馴染みの関係を増やすよう努めている。	
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	会話の橋渡しをし、同じ空間で共に楽しめるよう工夫している		

自己	外部	項 目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	サービス利用が終了しても、その後のサービス利用に関する不安等を伺い、他のケアマネに相談しながら、安心して次のサービスに繋がれるよう支援している		
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	日々のコミュニケーションの中で、ご本人の意向を確認し、職員間で共有に努めている	普段の会話、行事への参加、入浴時などの支援を通して希望や意向の聞く機会をつくり、繰り返し同じことを話され、困難な時でも、いつものこととは思わないで、24時間のチャートで職員が話し合い検討して、本人の思いを把握するよう努めている。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	アセスメントシートを活用しながら、ご本人、家族からの聞き取り情報把握に努めている		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	日々のコミュニケーションや状態の観察を通じて、現状の把握に努めている		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	ケアチェック表を基に介護計画が現状と合っているかカンファレンスで意見交換している。継続、変更等、家族にお知らせし、理解を得ている	担当者がケアチェック表により ①目標の声かけ ②物忘れへの対応 ③レク・行事への参加の声かけなど見守り点検している。1ヶ月の支援経過を基に職員で検討し、ケアマネジャーが家族や関係機関と相談しながら、3ヶ月ごとに見直しを行い現状に即した介護計画を作成している。	
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	日々の変化等、介護記録に記載しカンファレンス、申し送り時、職員間で話し合い支援内容を検討している		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	必要に応じて、他事業所に相談したり情報を収集し、対応している		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	公民館行事に参加し、地域の方々と交流の機会としている		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切にし、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	入居前のかかりつけ医は継続。家族の協力を得ながら受診同行を依頼し、情報交換している	本人・家族の希望するかかりつけ医を利用しているが、原則、家族同行での受診であるが、職員の同行が増えている。家族が同行するときは、本人の症状を文書で情報を提供し適切な医療を受けられるようにしているほか、職員同行した時は、受診結果を家族に連絡している	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	週1回訪問時に入居者の状態について報告をし、健康チェックを行なっている。又、急変時には訪問してもらったり、指示を受けたりしている		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	入院した際、入院までのADLを報告したり入院中の状態報告を受け、退院後の受け入れ可能か等、情報交換している		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	昨年も家族アンケートをとり意向を伺ったが利用者の入れ替えもあり、今年度もアンケート予定している。又、職員の入れ替えで新人もいるので重度化や終末期の対応の勉強会を予定している	法人では重度化や終末期への対応方針を定めているほか、事業所としても、事業所で終末期を迎えたいとする家族アンケート結果もあることから、家族が付き添うことを前提に看取りに対応する方向でスタッフ間で勉強会を設けるとともに、家族をはじめ、医師、看護師との連携の仕組みづくりについて検討を始めている。	
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	救命救急講習会に参加しているが、新人職員は現在未講習。今後開催時は参加予定している		
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	年2回避難訓練を実施している。その際、地域協力隊、同法人のGHや老健の職員にも協力を得ている	6月は台所を、12月はボイラーからの出火を想定した避難訓練を実施した。地域協力隊5人、隣接の法人施設職員の協力を得ている。建物の構造上からの避難経路の改善工夫のほか、利用者の怪我等にやや気を遣い今後の訓練方法に検討を要するとしている。なお、警備保障会社との緊急連絡システムや周辺住民への緊急時の赤色灯を設置している。	防火安全対策及び避難訓練等のためにスプリンクラーの設置を始め、被災時の住民への周知赤色灯の設置等、安全対策に様々な工夫しながら取り組まれているが、今回の諸課題について今後活かされることを期待する。

自己	外部	項 目	自己評価	外部評価		
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容	
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援						
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	居室はその方の居住空間であることを意識、ノックや声をかけて入室。顔を見てあいさつしてから作業に入るなど配慮している	年長者として敬意を払う姿勢を大切にしており、洗濯たたみや調理への参加に感謝の言葉がけを忘れないように、排泄の誘導・声がけでは本人の気持ちを傷つけないように、無断外出には、本人を傷つけないよう見守りし、安心して過ごせるよう支援に努めている。		
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	認知症の進行や身体能力の低下により困難な場合が多いが日々のコミュニケーションの中から意向を察するようにしている			
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切にし、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	その方のペースを大切にしながらも、孤立せず集団での楽しみがもてるよう配慮している			
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	自分の身だしなみを意識する方はいないが、外出時には季節に合った服と一緒に選び、楽しめるようにしている			
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	食材の下準備、盛り付け等、体調を見ながら一緒に行動するようにしている。彩にも配慮し、見た目でも楽しめるようにしている	雛まつりや節句、母の日などには行事食をつくり、食材の買い物、調理、片づけなど役割を持って参加してもらい、時には全員で外食したり、誕生会をしたりして工夫しながら、職員も一緒に食卓を囲み、楽しい食事となるよう支援している。なお、栄養士資格を持つ職員によるカロリー計算などバランスの取れた食事にも留意している。		
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	一日の食事、水分量を記録し、少ない場合はこまめに声掛けしたり、好みのものに変更している。入居者の状況に応じて、食事形態の変更も行なっている			
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	毎食後、声掛け、見守り、介助を行いながら、口腔内の清潔保持に努めている			

自己	外部	項 目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	排泄チェック表の活用により、排泄間隔を把握し声掛け誘導している	排泄チェック表を作成し、時間、水分量、表情などを観察し誘導している。怪我をしてオムツ使用になった利用者には、個別に身体状況を観察しながら支援した結果リハビリパンツまで回復するなど、排泄の自立に向けて取り組み、全員がトイレでの排泄となっている。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	食物繊維の多い食材を取り入れたり水分を取りたがらない方へはゼリー状やトロミをつけたり工夫している		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めてしまわずに、個々にそった支援をしている	ホームのペースで午後から1日おきで入浴している。“今日は入る日”と理解し声掛けに応じ入浴している	希望によりいつでも入浴できるよう準備をしているが、通常は一日置きの午後入浴としている。一人ずつのゆったりとした入浴を楽しんでいるが、介護度の進んでいる利用者には職員二人で対応している。衣服の着脱時には羞恥心に配慮し、また支援中の機会を大切にし、本人の希望や思いを聞くように努めている。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	就寝は本人のペースで行っている。自力で移動できない方は様子を見ながら、声掛け、誘導している		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	薬の内容、副作用、用法、用量など、すぐ確認できるようにしている。変更があった場合は申し送り事項に記入し、状態観察している		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	ADLや生活歴に応じて軽作業の声掛けをし、作業中、終了時には感謝の言葉を心掛けている		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	フラツと外に出かける方がいるので、さりげなく付き添い、ホーム周辺を散歩している	普段は、近くの公園やホーム周辺の散歩をしている。季節的には花見、紅葉狩りに出掛けるが、トイレ利用の関係もあり、近場で設備の整った場所に限られている。また利用者が高齢化し車椅子の利用者もいることから一人ひとりの健康状態に合わせ、出来るだけ外出の機会を作るよう努力している。	

自己	外部	項 目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	お金に固執している方がおらず、家族管理となっている		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	電話をかけたいという希望に応じ、家族とのつながりや本人の思いを大切にしている		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	食席テーブルの配置を変え、全員が見渡せるように工夫した。食席が分からない方に座布団を敷き目印とした	天窓からの採光で明るく、広がりを感じるホールとなっている。ソファが人数分コの字に置かれ、また食卓は2グループに分けて全員の顔が見られるように工夫した配置になっている。全員が明るい表情でゆったりとくつろいでおり、会話が弾む様子も見られる。側壁には写真などが飾られ、鉢花を置き季節を感じるよう工夫した共用空間となっている。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	自分の座るところが決まっている方もいるが、多くは好きな所に座って、TVを見たり、草花や外を眺めて過ごしている		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	入居時に説明を行い、馴染みの物を持参して頂けるようお願いしている	ベッドや床暖房、冷房用クーラー、洗面、ロッカーはホームの備付となっており、利用者はタンス、小物入れ、テーブル、仏壇、家族の写真などといった入居者の馴染みのものを持ち込み、それぞれ個性のある雰囲気のなかで居心地よく過ごせるよう工夫している。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	トイレ、浴室、居室はそれぞれ戸口に表示し、わかりやすいようにしている		